

専攻科 6月18日（水）

第5回講座 「里山の生物調査実習」(データ取りまとめ)

講師 北澤哲弥氏（江戸川大学非常勤講師）

日時 平成26年6月18日（水）10:00～15:00

場所 千葉塚本ビル

テーマは、データ整理、解析、まとめ

北澤哲弥講師による里山講座（全4回）の最終回。これまでの実習の振り返りを行い、おぐらの谷津と森で調査実習した草地と樹林のデータを植生データに変換し、データを活用して里山保全の在り方について考えるという講座である。生物調査の技法を教えてもらい、講座を通して自然を保全する客観的な手法について初級編を学ぶことができた。

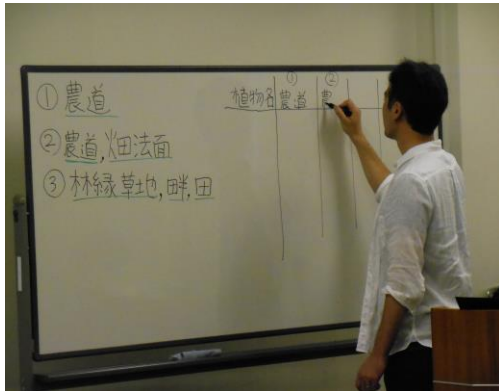
それぞれ調査を行ったチーム毎に分れ、講師の指導で持ち帰ったデータを整理、解析し、それを基に植生データの取りまとめを行った。基になるデータをチームで整理し、解析を行うための信頼性があるデータに変換して、里山の変化を捉えるという実習である。調査データを計算して解析用のデータに置き換えることで、谷津と森の植物の様子が、例えば、植物の量などで客観的な比較ができるようになる。これは現状を知るだけでなく、これからの里山保全の在り方を検討する時の資料となる。植物群落調査では、現場で調べることが全てではなく、調査を始める前にもやることもある。例えば、調査地をタイムマシンでみることも必要とのこと。明治時代の地図によるとこの森にはアカマツが多かったようであるが、そうすると、現在優占度の高いクヌギのある森を守ることが自然再生になるかという、そうもいかないものがあるとの指摘は印象的であった。



北澤 哲弥講師



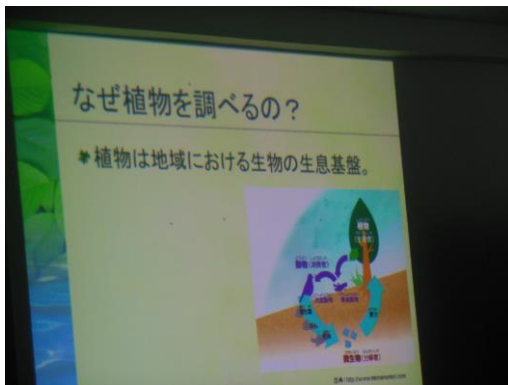
チームに分かれデータの整理、解析を行う。



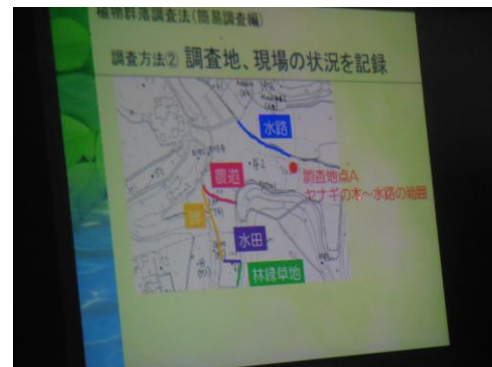
調査地を農道、農道・畑法面、林縁草地、畔・田に分けて、植物をグルーピングしてみる。



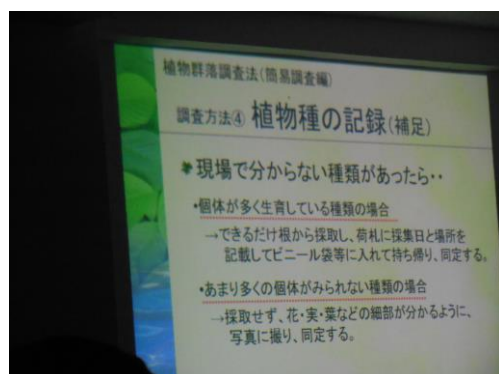
調べた植物の胸高直径と草丈と被度を基に、胸高断面積などを計算し、解析用データに変換した。



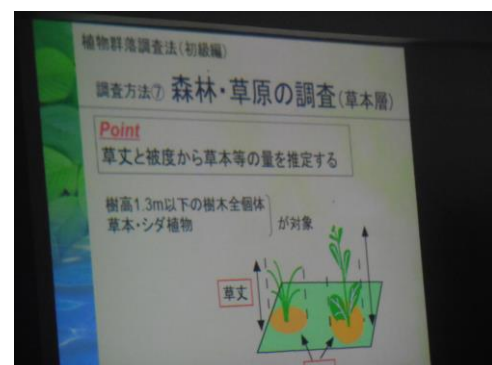
調査にあたって基本になるのは、「何故植物を調べるのか」という問題意識。話はここから始まる。



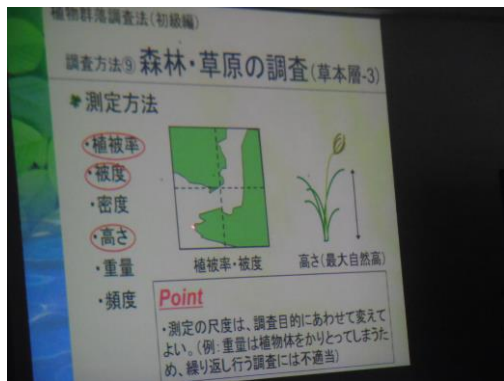
振り返りとして調査地と現場の状況を再確認した。農道、水田、林縁、水路に分かれる。



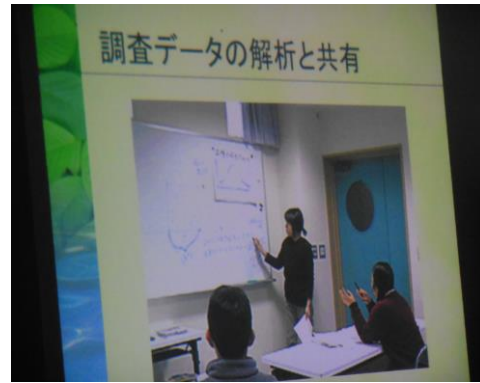
植物種の記録について説明があった。例えば、現場で分からない種類があった場合はどうする？



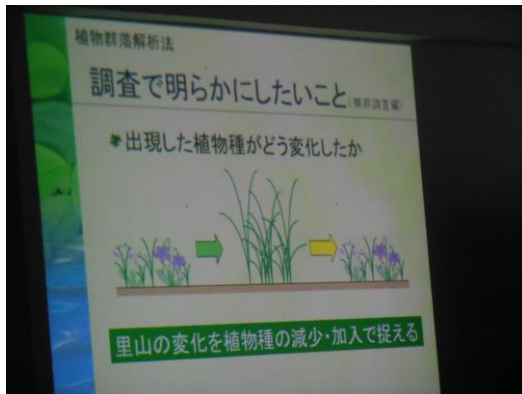
森林や草原での草本層の調査は、草丈(背の高さ)と被度(地表を覆う割合)から植物の量を推定する。



植物の植被率、被度、高さの測定などが森林・草原調査の測定方法の初級編。これらを測定した。



調査データの解析と共有について



植物群落を解析するには、調査票・記録用紙を大切に保管し、調査で明らかにしたいことを明確にしておくことが基本となる。

種名	1班	2班	3班
アヌギ	1744.7	4206.7	2438.8
イヌツゲ	1049.9	902	9.6
サワフツギ	119.7	22.1	15.7
エノキ	100.6		
エゴノキ	50.5		50.5
ヤブミ	48.0	20.4	19.4
ビラギ	19.2		18.2
ヤマザクラ	58.9		56.9
ヤマコナハシ	143.7		28.3
コブシ	118.6	119.6	
コマユミ	17.1	17.1	
クワミスズクサ	38.5	38.5	
計	1396.8	4512.6	2637.8

木本層の解析では、調べたデータを基に胸高断面積、相対優占度の数値に転換した。各チームは、木本層、草本層の解析を3時間かけて行った。